


## 「反応大変良い」破れた太鼓の革、ストラップに “鼓童”と障害者事業所がコラボ



西日本新聞 



国内外で活動する太鼓芸能集団「鼓童」（新潟県佐渡市）が、破れた革を再利用したストラップを売り出した。制作を手がけるのは長崎県雲仙市小浜町の就労継続支援B型事業所「おひるの森」。運営会社の森久之社長（51）が、かつて鼓童の舞台メンバーだったことが縁となり、小浜発のコラボ商品が誕生した。

破れた太鼓の革で作った「鼓童×おひるの森」のストラップ

【写真2枚】ストラップを作成する様子

ストラップは和太鼓を模したデザインで、桶（おけ）太鼓の大（鼓面の直径4・5センチ）、小（同2・5センチ）と宮太鼓（同2・5センチ）の3種類。細かく裁断した木材を胴に見立てて塗装し、革を貼り、ひもを飾り付けた。

森社長によると、例えば一尺八寸（約55センチ）の太鼓のうち、破れた部分を除いてどれぐらいの革が使えるかや、障害のある事業所の利用者20人の誰がどの工程を担うかを計算した上で、月100個という生産目標を掲げた。森社長は「世界中にファンのいる鼓童と組む以上、品質は落とせない。利用者たちの技術の高さを証明する良い機会でもある」と語る。

鼓童がオンラインで7月12日に販売を始めたところ、初回納品分140個が2週間で売り切れた。鼓童の広報担当者は「破れた革は焼却処分していた。SDGs（持続可能な開発目標）の観点からも、購入者の反応は大変良い」と言う。

小浜町出身の森社長は高校1年の時、長崎市内であった鼓童の公演に接してその迫力に衝撃を受けた。卒業後、入団のために18歳で佐渡島へ渡り、1年間の研修所生活を経て欧州ツアーのメンバーに選ばれた。23歳で退団するまで世界中を旅したという。

小浜に戻り、建設会社で働いた後、2010年に現在の会社を設立した。少しでも利用者の工賃を上げたいと知恵を絞る中、太鼓の革の再利用を思い付いた。独自にストラップの試作を2年間続け、制作のめどが付いたことから昨年秋、鼓童側に協業を申し出た。

ストラップ作りは細かい作業の連続で、装飾品のため検品にも気をを使う。森社長は「とにかく長く作り続けたい。ストラップを気に入った鼓童ファンが、小浜を訪れるきっかけともなれば」と期待する。

鼓童のオンラインストアで発売中。3種類いずれも1個1800円（税込み）。